

ペン俳句会 句会報(三五四号)

令和六年三月七日(木)

兼題『梅』、席題『口』

句会を、今年二月と同じ場所で開催。出席は十名。(投句十一名。元斐さんは投句なし)

中村 晃也

老梅の少し翳ある気品かな

小魚の群れある河口春暮色

借景の富士に目がゆく探梅行

紅梅や椅子に置かれし絵の具箱

地下鉄の出口や春の空四角

春めくや雨だれの音ピアニシモ

新田 ゆふき

紅梅の誘ふがままの泥濘や

春富士を眺むる風呂に肩並べ

城跡の空堀浚ふ春疾風

春薄日下校の子等のほら話

黒犬の目の優しさや春の雲

水口の薄ら氷に落つ一滴

宮原 凧

草萌えや柔らかに置く土ふまず

春麗ら神保町に途中下車

一陣の風に匂へり梅の花

交差点行き交ふ人の春の色

春愁や家族葬てふ訣れあり

春来たり半音上がる電話口

松田 一文字

啓蟄や厨を走る嫌な虫

春めくと日に日に伸びて庭の草

足止めて香りを愛でつ夜の梅

床の間の梅の一枝やにじり口

黒土に白のまだらの春の雪

春宵や遠ざかりゆく猫の声

大津 そうかい

山笑ふ園児の列の大蛇行

彼のビルのかの窓の席春灯し

汝の口の鶯餅の黄な粉かな

紅梅の枝を透かせる空まさを

春山やランナー消ゆる霧の中

親が子を子が親危め春寒し

志村 良知

風花の古都に近鉄『あをによし』

舍利堂や涅槃図の色鮮やかに

古き宿早やも馬酔木の花盛ん

梅の香や学僧の声登廊

志摩の海に春の夕焼け光り道

蛤に辛口の冷や旅の昼

長尾 進一郎

舞ひ降りて我に用事か紋白蝶

甘き香に誘われひとり梅の園

いい湯なり天井霞む春の宵

春光る水上スキーの航跡に

穏やかな河口漕ぎ出で春の海

春雲を貫く機影見え隠れ

浜口 金魚姫

道真忌「飛び梅」の歌迎る旅

春の夢異人館カフェコンサート

パンジーやこの色あの色咲き競ひ

萩焼の猪口に白酒紅の跡

蠟梅や闇深くして耳澄ます

梟の瞳のカーン閉園ベル

内藤 まりこ

友よりの雛の絵八ガキ春来たる

灯台に灯りの入りき冬の蝶

水仙の咲く川べりにたぬきの子

白梅のほんのり紅し朝の晴れ

口々に綺麗寒いと春の雪

春節や雪の白川賑わひて

安藤 晃二

天満宮へたりし牛や梅見酒

艶めくや真紅の梅に鴨ひそむ

牡丹雪に口あんぐりと空眩し

粉雪や山茶花も散る苔の上
大宰府へ誘なふ香り谷
ぼとり落ち藪椿座

西川 知世

キヨスクに買うて焼売春うらら

ところ狭しと茶屋に靴脱ぎ梅の唇

客船の窓の幾層春かもめ

鯉の口よりあぶくがふたつ春深し

爆竹はしる春節の中華街

船笛ぼうと薄氷を驚かす

次回は令和六年四月四日(木)、

兼題は季語「恋猫」(中村晃也さん出題)、

席題は西川知世さん出題の「寝」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

猫は人の身近にいる動物。春の宵、恋の炎に身を焼く鳴き声はあわれでもあり、滑稽でもある。

和歌や連歌では雅な鹿の恋は詠まれたが、猫の恋は卑俗なものとして読まれることは少なかったらしい。しかし、滑稽、俳虐を好む俳人には格好の句材で、芭蕉をはじめ蕉風俳人が盛んに詠むよ

うになったそう。人間に近く暮らす動物として、洒脱でユーモアのこもる句が多く、恋やつれした猫の姿に俳諧味を見て、人間の恋を重ねた。季語の本意であろう。人の近くにいる動物であるからか、傍題は多い。恋猫・猫さかる・浮かれ猫・猫の夫・春の猫・通う猫…など。

「猫の恋」は初春のころの季語であるが、「猫の子」は別だての項があり、晩春の季語。

猫の恋止むとき闇の朧月

芭蕉

足跡をつまこふ猫や雪の中

其角

声たてぬ時が別れぞ猫の恋

千代女

尾は蛇の如く動きて春の猫

高浜虚子

恋猫の恋する猫で押し通す

永田耕衣

山国の暗すさまじや猫の恋

原 石鼎

恋猫のかへる野の星沼の星

橋本多佳子

病廊にわれを呼び止め妊み猫

西東三鬼

恋猫の皿舐めてすぐ鳴きにゆく

加藤楸邨

恋猫の夜闇の火の気いつまでも

飯田龍太

微震ある日本列島猫の恋

大木あまり

借りて来し猫なり恋も付いて来し

中原道夫

恋の猫神父の膝を嫌ひけり

柴田佐知子